テレカコレクション

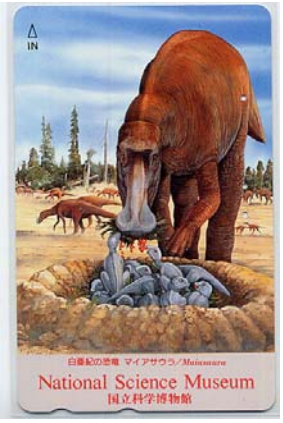
＜　第３４回　恐竜　編　＞　　健

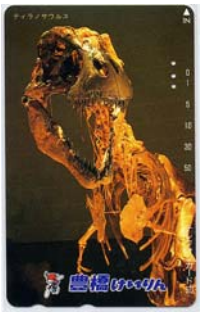
ここのところ食べ物系のテーマが続いたので今回は趣向を変えて「恐竜」を取り上げてみた。本来このテーマは夏の時期がいいかなと思っていた。

恐竜が地球の熱帯の頃に棲息した動物であり恐竜展なども夏休みに照準を合わせて開催されることが多いからだ。**「白骨の恐竜吼える夏休」「炎天や行列長き恐竜展」**は自作の俳句。出来はともかくこの時期の感じは出せたかなとは思っている。

さて本題、恐竜にロマンを感じる人は多く特に子供の心を捉えて放さない。
自分が恐竜に興味を示した最初は少年サンデーに掲載されていた漫画版「少年ケニヤ」の１シリーズ。「ロストワールド」の異界へ迷い込んだ少年ワタルの冒険譚。ティラノザウルス、ブロントザウルス、トリケトラプス、ステゴザウルスなどの奇抜な姿と名前に惹かれた。尤もこれらの名は研究が進むうちに名前も整理され分類に合うよう変更され、無くなってしまったものも多い。Ｔ－ＲＥＸなんて名前は味気ないし、気に入っていたブロントザウルスの名前も今は使われていないのは淋しい気がする。この頃の漫画誌は漫画一辺倒でなく科学ものや、世界の不思議、奇人・偉人などの記事やコラムが結構載っていた。恐竜はそれらの中でも人気のあるテーマであり貪るように知識を吸収した。恐竜の生態はいわば子供にとっては一般常識のようなものだった。恐竜にロマンを感じる理由はそれぞれだがはるか昔にこんな大きな動物たちが闊歩していたと思うとワクワクする。そして原因不明のままある時期に一遍に姿を消してしまったという謎も大きな理由の一つだろう。

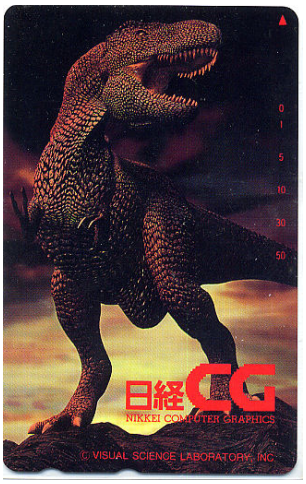
恐竜を実体験したのは上野国立博物館へ見学に行ったのが始めてだ。小学生の時だったが正面入り口前にはＤ５１とシロナガスクジラの大ジャンプしている剥製（？）が展示されていて初めて見るものには相当のインパクトがあった。今見ても飽きの来ない躍動感のあるしろものだ。恐竜については実物大の白骨を組上げたものをはじめいろいろな恐竜の骨格部位の化石が展示されていた。





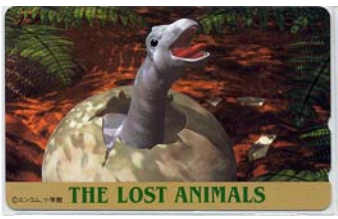
人気のあったのは恐竜の復元ジオラマだ。１階に人形を使った原始時代の様子や大きな恐竜の像を使ったもので広い場所に図鑑の絵図のように実物のよう復元模型が配置されていた子供の目には圧倒的な迫力があった。

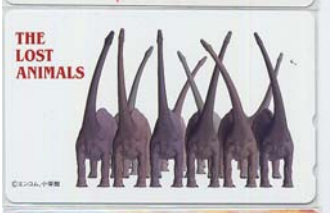
残念なことに新館に建替えられた時に作り物のジオラマを廃し発掘されたものを主体にしてしまったのは楽しみが半減のような気がする。最近の恐竜博も大々的に行われる割には新発見の化石を謳い文句にした展示物を見るのが主体でその気になれば２０分もかからないしろものだ。もう少し夢のある展示をこころがけてもらいたいものだ。



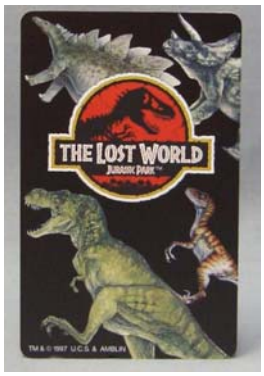
尤も、最近は実体が実感できるような触れる展示物の企画も増えてはいるのだが。後もそのまま残っており今行っても見飽きない。

恐竜の出てくる小説で印象に残っているのはフレドリック・ブラウンの「最後の恐竜」、星新一の「午後の恐竜」、小松左京の「果てしなき流れの果てに」だ。ブラウンはＳＦショートショートの名手として有名だが長編もこなすしミステリー･普通小説もこなす作家で好きな作家の一人だ。「最後の恐竜」は「未来世界から来た男」（創元文庫：絶版）に収録された極短い短編だ。灼熱の太陽が残る大地を飢えと乾きで瀕死の恐竜が獲物を探しよろよろと歩いてゆく。空には恐竜の死を待つ鳥類の姿。地にはすばしこい小動物が同じく彼が倒れるのを待ってついて来る。いらだつ恐竜の心の声を綴った臨場感のある話だった。「午後の恐竜」は、ある日曜日の朝、突然現れた幻影。幻は地球誕生から現代までの歴史をたどるがごとく次々現れ消えてゆく。恐竜の時代に入り子供たちは喜ぶ。

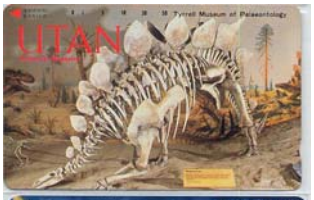




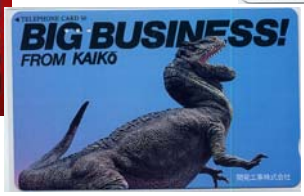
人は最後の瞬間自分の人生をたどるという。核戦争の勃発を知った父親は地球自身が最後を悟り幻を見せている事に気づく。父親は家族をそばに呼び寄せ核爆発の瞬間、まさしく自分の人生・家族の歴史が次々と浮かんでゆくのを見たというストーリー。叙情的に描かれていて星作品の中では好きな作品の一つだ。後に漫画化されたり、ＮＨＫでＴＶ化されたはずだがそれらは見ていない。



映画では何といっても「ジュラシックパーク」だ。それまでの恐竜映画を一変させるもので映画の成功の後「ジュラシックパーク」以後以前という区切りができ、飛躍的に映画の質が変わった。自然なＣＧはもとより恐竜研究の成果をストーリーに組み込んでいる点も評価できる。実際のところ恐竜研究はぼくらの子供の頃の恐竜に関する知識を駆逐するほど変わっている。



一例をあげれば「ゴジラのような尻尾を引きずる二足歩行→尻尾をあげる前傾姿勢」「恐竜の知能は実は高かった」「ティラノザウルスは獲物を襲うより腐肉をあさる方が多かった」「冷血動物→温血動物」など子供の頃と正反対の説が主流になっていたりする。実は恐竜の完全な化石というのは少なく部分部分を推測でつないだものが多いのだそうだ。



ゆえに新たに化石が発見されると一遍に研究が進み常識が覆されるという訳だ。恐竜は滅びてなお興味のつきない永遠の研究テーマといえるようだ。